

法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局

192-0051 東京都八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内 FAX 番号 ⇒ 042-627-7227
 ブログ <https://hokke-commons.jp> / メールアドレス hokkecommons@gmail.com

巻頭言

法華コモンズとの縁と

私の天台三大部の研究

創価大学教授・(公財) 東洋哲学研究所副所長・当学林教学委員 菅野 博史

私と法華コモンズとの縁は、コモンズの前身ともいえるべき本化ネットワークの研究会に、西山茂先生から講師としてお招きを受けたことでした。『法華経』と宗教的寛容についての拙論を読んでくださった西山先生から、同じテーマで良いので話をするようにとご依頼がございました。多忙を理由に、二回ほどお断りしたのですが、三回目のご依頼がございましたので、偉い先生から三度も頼まれてお断りするのはたいへん失礼に当たると思い、お引き受けすることになりました。そのことが縁となり、その後、常円寺を会場とした研究会にたまに出席するようにになりました。そうこうしているうちに、『シリーズ日蓮』全五巻(春秋社)を完成したことを契機として、本化ネットワークが法華コモンズ仏教学林に発展的転換を遂げる際に、教員委員の一人に加えていただいて、今日に至っています。

コモンズ設立の前に、法華宗陣門流の宗務総長をなさっていた故佐古弘文先生ともお付き合いの機会がございました。佐古先生は拙著『一念三千とは何か』をとくに気に入ってください、何度もご自分の関係する講演会の講師として招いてくださいました。先生のご依頼で、佐古先生、末木文美士先生、私の三人で、「日蓮思想の現代的意義」(『中外日報』二〇一三年一月二日号)という鼎談を行ったのも懐かしい思い出です。私たち三人の共通点は、田村芳朗先生の弟子であるということでした。

コモンズ創立のときに、ありがたくも講義の機会を与えていただきました。それ以前から、福神研究所の主催で、毎月一回、『摩訶止観』の講義をしていましたので、常円寺という同じ会場ですし、同じ日であれば、それほどの負担がないであろうと思ひ、喜んでお引き受け致しました。二〇一六年四月からの二年間は、『法華玄義』の講義をし、二〇一八年四月から『法華経』・『法華文句』の講義をしています。

篤学の士とともに、天台三大部を学ぶことは、普通、大学でも容易に実現できることではありませんので、私にとっては得がたい機会です。思い返せば、東大大学院の入試の面接におい



2020年12月6日『これからの天皇制』発刊記念シンポジウム 参加の講師先生方

て、玉城康四郎先生から、若いときには、できるだけ広い視野を持って研究するようにとのご指導を受けました。このことは、これまでも文章にしたことがありません。私は小学生の頃から日蓮の『御書』に親しんでおり、そのなかに入る天台三大部に関心を持っていましたので、大学院に入学した後は、天台三大部を研究したいと率直に先生に申し上げたのでした。それを受けての先生のご指導が上に紹介したものでした。そこで、私は大学院では主に吉蔵の法華経注釈書を研究しましたが、その後、しだいに天台三大部の訳注研究に従事するようになっていきました。

これまで、第三文明社から『法華玄義』、『法華文句』の訳注研究を刊行し、大蔵出版からも『法華玄義』の訳注研究を改めて刊行しました。今、東洋哲学研究所の研究プロジェクトとして、天台三大部の現代語訳と湛然の三大部注の現代語訳に取り組んでいます。すでに『法華玄義』上・下は刊行しました。二〇二〇年一月には松森秀幸氏と共訳で『法華玄義釈籤』上を刊行しました。この翻訳がすべて終わるのは、計画上では、私が七八歳のときで、本の刊行は八二歳で終わる予定です。



菅野 博史 先生

す。もちろん単なる計算上のことです。その他、これまで第三文明社から『法華玄義』、『法華文句』を出しましたので、これらと同じ形式で『摩訶止観』も刊行する予定です。日本では訓読訳も重要な役割を果たしていると思います。

二〇二〇年は、コロナ禍で皆さんも大変なご苦労があったと思います。私もはじめてZoomを使ったオンラインの講義を経験致しました。Zoomの講義も約半年間はZoomを使った録画を配信していただきました。一〇月から対面の講義と録画の配信を両方活用していますが、感染者の数が増大している今日、いつまで対面をして良いのか迷うところです。私自身は、受講生の顔を見ながら講義する方が、講義のやりがいがあると実感しています。

新型コロナが原因ではないのですが、二〇二〇年は長いお付き合いのあった、親しい方が四人もお亡くなりになりました。私もそういう年齢に近づいたのだと思います。諸行無常を感じずにはいられません。私は六八歳ですが、田村芳朗先生がお亡くなりになった年齢に達しました。お亡くなりになる直前、病室にお見舞いに伺ったとき、先生は私に、『法華経』から天台、そして日蓮まで研究するように指導してくださいました。恩師のご指導にお応えするには、まだまだ遠い道を歩まなければなりません。今後も研究に精進したいと思います。

沙婆即「靈山浄土」において、「衆生所遊樂」が実現できることを目指し、希望を持って新年を生きたいと思います。

(了)

講義報告

末木文美士先生

仏教哲学再考

—『八宗綱要』を手掛かりに—

報告 澁澤 光紀

昨年(二〇二〇年)より京都から東京に戻られて、あらたに「未来哲学研究所」も創設された末木先生ですが、このたび仏教哲学の全体を見直すという遠大な作業にとりかかるために、本学林で講座「仏教哲学再考」を開講されました。テキストとして、仏教の全体図となる『八宗綱要』を用いていますが、それは開講案内の講義概要にあるように「本書を手がかりとしつつも、それに捉われずに、諸宗の教学を今日どのように受け止め、考えたらよいか、応用的に問題を拡げ、手探りして検討」していくためです。すでに終了した三回の講義内容について、簡単に報告いたします。

まず第一回では進め方を話されて、テキストを細く説明するのではなく、それを基にしながらその哲学を学んでいくことが主眼となること、また予定として一回の講義で一宗ずつ、俱舍宗、成実宗、律宗、法相宗、三論宗、天台宗、華嚴宗、真言宗の八宗を論じていく(成実宗を除く)こととして、約八回で読み終わります。

講義では、著者の凝然と『八宗綱要』の概念を説明して、その時代背景が語られました。「宗」といっても「教団」ではなく、「宗」は理論・実践の組織的体系のこと(学派や学部)を示し、一つの寺が多宗を兼ねるのが普通な、王法・仏法相依論による八宗体制の時代でした。また、この時期の仏教を捉えるには、平家の南都焼討(一一八二)の後に盛り上がった「仏教復興運動」が重要です。東大寺大仏再建に象徴される「復興」に、仏教

界が全体として巨大なエネルギーを傾注していて、新仏教とされる栄西や法然もこの運動に密接に関係していました。ですから、従来の新仏教（異端派）VS旧仏教（顕密仏教）という対立は全くのフィクションであるとして、新たな中世仏教観を提示されました。

第二回は本論に入り、「俱舎宗」が世親作の『阿毘達磨俱舍論』に依る宗名であり、梵語の阿毘は「対」、達磨は「法」、俱舎は「蔵」を意味して「対法蔵論」とも漢訳し、説一切有部を根本とすること等を説明されました。また諸法を分類し詳説した「五位七十五法」がありますが、その根本は「三世実有法体恒有」です。末木先生は、なぜ法体不変の三世実有説が必要かについて、三世（過去・現在・未来）という人間の生きる時間の中に、物理的時間では捉えられない内的体験の時間（淨土や輪廻の時間）があることを指摘されます。そして「業と輪廻」に関して、十二因縁を過・現・未に配当した「三世両重の縁起」の意味について、現世的秩序や生物・物理の枠を超える要素があることや、菩薩の胎内修行とみることができると、などを語られました。

第三回の「律宗」では、凝然が東大寺の戒壇院に住した「律僧」であり、鎌倉期の律宗復興を担った『律宗綱要』という著作もあることを紹介し、日本仏教は戒律軽視といわれるが、実際は鎌倉期と江戸期に「戒律の復興」があつて、仏教復興の先触れだったと指摘。また、律宗の中心となった「四分律」を説明した後、凝然



六六歳の『律宗綱要』が二九歳の『八宗綱要』とどう違うのか、三点を挙げました。一つは「三聚淨戒」中心であり、四分律は小乗だが大乘的に解釈されて、梵網戒は在家も受ける「通受」だが、具足戒は出家のみの「別受」とされる。二つ目は「戒体論」として円教の仏性戒体が論じられていること。三つ目に「日本の伝持」として自誓受戒の覚盛や叡尊の真言律宗の流れ、また真言宗泉涌寺派の祖で北京（ほっきょう）律を伝えた俊仍を論じたこと、などを講義して頂きました。

以上、簡単に講義内容の一部を紹介しましたが、刺激に満ちた末木先生の講座「仏教哲学再考」は、二〇二一年度前期も継続します。なお、事前にテキストの『八宗綱要』の予習しておく、理解は一層深まります。

講義報告 法華仏教講座

第一回 花野充道 先生 講義

第二回 高森大乘 先生 講義

第三回 株橋祐史 先生 講義

報告 布施 義高

法華コモンズでは、その前身である本化ネットワーク研究会時代の講義スタイルを引き継ぐ形で、平成二十九年度から毎年後期（月一回×半年）、毎回、斯界で活躍著な専門家を講師にお招きする「法華仏教講座」を開催させて頂いている。本講座の開設は今年で四年目を迎える。

令和二年度の本講座は、第一回（十月）Ⅱ花野充道（本学林教学委員、法華仏教研究会主宰）、第二回（十一月）Ⅱ高森大乘（日蓮宗勸学院嗣学、元・立正大学准教授）、第三回（十二月）Ⅱ株橋祐史（興隆学林専門学校学監）、

第四回（以下、令和三年）一月）Ⅱ村上東俊（法華宗〈陣門流〉学林教授〈監事〉）、第五回（二月）Ⅱ小松正学（顕本法華宗教務部長）、第六回（三月）Ⅱ西岡芳文（上智大学特任教授）の各先生という陣容である。以下、本稿執筆時点で終了した第三回講座までの講座の様子と内容を少しく報告したい。

●第一回目の花野先生の講座は十月三十一日（土）、常圓寺様祖師堂三階会議室で執り行われた。折しも前日に花野先生の古稀記念論文集（二冊一組）が山喜房仏書林より発刊され、当日はスタッフが同書を講師机上に用意する等、さながら祝賀記念的な色彩を伴う特別講義となった。

今回の花野先生の講義は、「日蓮聖人と伝教大師の『依憑天台集』」。

先生は、まず初めに、宗学と思想史学の研究方法の相違を論じられ、日蓮仏教を研究する際のアプローチにも違いが生ずることを委しく説明された。

そのことを踏まえて、花野先生は、今回のテーマである、日蓮教学上における『依憑天台集』について微細に論じられた。

すなわち、日蓮聖人は、台密の淵源が日本天台祖師の最澄教学にあることを充分に知りながら、後に最澄を円密一致主義者ではなく、密教を批判した法華経最勝



花野 充道 先生

主義者と規定されたこと。『報恩抄』で『依憑天台集』を「秘書」と称されたのは、他の最澄の著作に明確な真言批判の文がないとの認識に由ること。一方、厳正な思想史的立場から『依憑天台集』を円密一致否定の書とすることに問題をも提起され、最澄と空海の間で交わされた手紙の内容を解説しながら、密勝顕劣主義者の空海に対し、最澄は円密一致主義者であったと結論づけられた。

続いて、日蓮聖人が『依憑天台集』に言及した遺文を列挙され、佐渡赦免の直前に記された『取要抄』の文を依拠に、円仁は大日経勝法華経劣の立場であるが、円珍の著作には大日経勝と法華経勝の両様の説示があると認識され、円仁と円珍の評価に差異を見ておられたことを示された。また、大日如来と多宝如来に関する重要な視点などを明快にご教示くださった。

最後に、本格的な学術の世界、殊に思想史学においては、研究方法論の一貫性、多くの資料や先行研究を踏まえた客観性と対象の内面に踏み込む主体性、そして、説得力と、その研究分野の深化に貢献する知見が盛り込まれているか否かが重要であるご教授いただいた。いつもながらの、大変迫力に溢れる花野先生のご講義であった。

●第二回目の高森先生のご講義は十一月二十四日(火)、Zoomによるオンライン実況講義として開催された。講題は「日蓮遺文の賢王と愚王」。『立正安国論』の上奏や度々の国家諫曉に示されたごとく、日蓮聖人は王法と仏法の関係性、殊に仏法の正邪、国王の賢愚に強い関心を向けられた。その際、仏典や中国・日本の史書等に基づいて過去の先例を引き、現在(鎌倉時代の当時)に照らして、その是非を論じられる特徴がある。

そうした視点から、今回、高森先生は、印度・西域



高森 大乘 先生

の王朝史・王統史上実在したことが認められる国王・帝王を中心に、日蓮遺文中の記述を整理された。すなわち、紀元前六〜五世紀頃の十六大国の時代から七世紀ヴァルダナ王朝期に至るまでの六王朝にわたり、代表的な国王について委細に論じられ、日蓮遺文に見られる賢王・明王、悪王・愚王、あるいは、賢者の出現と正法の流布、隣国の賢王による治罰、賢王と折伏について、また、『開目抄』の撰折義についても、正確に解説してくださった。

総じて、日蓮聖人は「賢王・明王とは、天地の道理あるいは法の邪正を弁えて政道を執行する国王で、政道に非ればこれを注進するような有能な賢者・諫臣を登用し、またその進言を汲み上げる度量を有した者、さらには人心を顧みず非道を行う悪王・暴君・愚王を誠責し治罰する者」と規定され、悪王・愚王はこの対極にある存在と受け止められていたことを明らかにされた。

斯くして、日蓮聖人は、当時の日本国の為政者が模範とすべき態度を指南し「謗法に染まった国王であっても、信仰の寸心を改め実乗の一善に帰依することが肝心で、これにより天下泰平・国土安穩が実現する」と主張されたと結ばれた。

Zoomの共有機能を用い、PowerPointでの視覚情報

を供しながらの明快な素晴らしいご講義であった。●第三回目のご講義は株橋先生による「慶林坊日隆の『観心本尊抄』解釈について」。十二月十二日(土)、Zoomによるオンライン実況で開催され、室町時代を代表する勝劣派の学匠・慶林坊日隆師(以下、隆師)の教学の枢要を知る好機となった。

Zoom開催であるにも関わらず、当日は本門流様の関係者をはじめ多くの受講者入室いただき盛会となった。株橋先生は、隆師の『観心本尊抄文段』や御師範・株橋日涌先生の大著『観心本尊抄講義』、そして大平宏龍先生の学説を踏まえながら、『観心本尊抄』全体を三段(第一段『定遺』七〇二頁L三〜七一二頁L八、第二段『同七一二頁L八〜七二〇頁L一三、第三段『同七二〇頁L一三以下』)に分けて細説された。第一段は第二段の序説として本門総名南無妙法蓮華経の所撰である別体の本門事具一念三千の解説に力点が置かれ、第二段は、滅後末法に流布すべき本門本尊の正体として、別体の事具一念三千を能撰総持せる南無妙法蓮華経を正顕し、この本尊を滅後末法に建立すべきことを主張。第三段は、総じて別体たる事具一念三千の法体を総名南無妙法蓮華経に撰在し、これを末法悪世の衆生の正行とすべきことを結した一部総結の文に当たると解していることが示された。



株橋 祐史 先生

その後、法種・仏種のことや、本門事具三千における種脱の問題、本門八品上行要付本尊の義証と文証と現証について、また、『本尊抄』での本門八品を示す局面、更に、一品二半と本門八品の問題や法界三段解釈、日隆師の『観心本尊抄』結文（「不識一念三千者……」）重視など、重要な問題を明快に論じられた。

講義全体を通して、株橋先生は、迹門理具三千↓本門事具三千↓総名題目の能所を力説され、総名↓末法相應事行観心、即ち末法の正行の大法たる能撰総持の南無妙法蓮華経を顕すと見ることの重要性を説かれた。そして、滅後末法衆生の下種を眼目として本門八品の経意と末法衆生のための上行付嘱の本尊が説かれ、本仏釈尊が本門八品を説き、久遠下種の南無妙法蓮華経を上行菩薩に付嘱したと見るところに隆師の『観心本尊抄』理解の枢要があるとご教示頂いた。

以上、雑駁な形で恐縮ながら、本講座の充実振りの一端を報告した。

講義報告

菊地大樹 先生

歴史から考える日本仏教⑥

日蓮と蒙古襲来の時代

報告 芹澤 寛隆

菊地大樹先生の連続講座シリーズ「歴史から考える日本仏教」は、2020年後期講座で第六期目を迎えました。前回講座「承久の乱から考える鎌倉仏教」に引き続き、今回は焦点を日蓮在世時の大事件である「蒙古襲来（元寇）」に焦点を当て、「日蓮と蒙古襲来の時代」のテーマのもと、全三回に亘り、歴史学の視点から蒙

古襲来という事件、さらにはそれを取り巻く宗教界の動きをご講義いただきました。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、全講座がZoomによるオンラインでの講義でしたが、熱の入ったご講義と活発な質疑応答が行われました。ここでは、これまでに行われた三回の講座についてご報告致します。

第1講は「13世紀の日本列島」として、13世紀の日本や東アジアの一般的情勢をしっかりと理解しておく必要があるという菊地先生の思いから、先行研究や当時の史料まで幅広くご紹介いただきながら、広い視野で「蒙古襲来」という事件についてご講義いただきました。まずはじめに、蒙古襲来に関する先行研究、また前近代、近代における「元寇史観」について確認し、私たちが歴史の教科書で学んできた「元寇」には、神風が存在など、近現代にイデオロギー的に形成されてしまった部分が少なからずあり、それを、乗り越える必要があるとのご指摘をいただきました。

その上で、「蒙古襲来」前夜の日本の姿を主に政治史の視点から史料に基づき、非常に精密にご紹介いただきました。承久の乱以降の皇室と幕府の関係、北条得宗家内外の争いと幕府政治の地方への波及など、「蒙古襲来」という事件が起きるまでの、そして文永の役の詳細な状況について歴史学の視点からご教示いただきました。



菊地 大樹 先生

第2講は「日蓮と蒙古襲来」と題し、前回に引き続き「蒙古襲来」について、当時の史料に基づいた、実状をご紹介いただきました。その中で、日本各地の神仏が仏威、神威をもって戦争に参加させられて、仏僧・神官らが神仏を操る主体として、その戦功の恩賞を求めたという姿をありありとお示しいただきました。

次いで、日蓮の名著の一つである『立正安国論』に説かれるところの「他国侵逼難」をどうとらえていたのか、御遺文と当時の対外情勢、鎌倉幕府の政治抗争からご教示いただきました。一回目の提出時と、二回目以降の提出では日蓮における「他国侵逼難」の捉え方に変化が生じており、『安国論』の性格が「勘文」から「記文」すなわち未来記へと転回しているという指摘をいただき、受講者一同、先生の視点に驚嘆する一幕もありました。

「蒙古襲来」という異国からの侵略という事態に対し、過去の事例（三韓征伐）を意識しつつ、修法としての密教や神道の祈禱によって、神々はそれに使役される兵士となり、その兵士を操る主体としての仏僧・神官がいたという構図があったこと、その構図は宗教的論理や本来の体系から乖離したものであったために、日蓮はその点を批判したのではないかと示唆は、受講者にとって非常に新鮮なものでした。

第3講では「変革と内乱の時代」と題し、前回に引き続き弘安の役から日蓮晩年に至るまでの思想が蒙古襲来を通じてどのように推移していったのかを明解にご教授いただきました。

日蓮にとって蒙古襲来とは何であったのかという問題は、これまで様々な角度で論じられてきましたが、それらには近代イデオロギーに基づく見解など、近代的言説にもとづき、結果からさかのぼって歴史的事実を解釈してしまっている例があり、特に『小蒙古御書』

を紹介し、日蓮の他国侵逼難・善神捨国論に於ける従来の見解の矛盾を指摘いただきました。

さらに先生は「蒙古襲来」後の中世社会についても多くの資料に基づきご紹介くださいました。「蒙古襲来」という大事件がもたらした影響は政治的、経済的のみならず、「また攻めてくるかもしれない」という恐怖や記憶から、精神的にも多方面に亘るとのご指摘は非常に示唆に富んだものでありました。

今期のご講義も多くの史料をご紹介いただき、「蒙古襲来」という出来事を幕府はじめ、人々がどのように捉え、意識し、行動していたのか、その中で日蓮の立ち位置はどのようなものであったのかという、非常に大きな視野からご教授いただきました。特に、近代のイデオロギーや歴史観に基づく理解が生み出す矛盾や問題点について丁寧にご教示いただき、そうした史観を乗り越える必要性、手段についても触れるなど大変示唆に富んだ内容でした。受講者の皆様それぞれに思い感ずるところがあったと思います。

毎回講義後は多くの質疑があり、それらに菊地先生は一つ一つ丁寧にお答えくださいました。オンラインという特性上、自宅の資料を示しつつ質問される方がおられたなど、とても熱心に議論が行われました。

次年度も引き続き菊地先生によるご講義を予定しております。多くの皆様の聴講をお待ちしております。

講義報告

《これからの天皇制》

出版記念シンポジウム報告

報告 澁澤 光紀

当学林で二〇一九年後期に開催した連続講座「これ

からの天皇制」が、昨年の一〇月下旬に本となって春秋社から発刊され、オンライン講座「これからの天皇制」発刊記念シンポジウム」が二〇二〇年一月六日（日）午後四時より無観客で開催された。実況中継の会場には北青山の持法寺様の客殿をお借りして、六名の講師のうち菅孝行先生、島菌進先生、大澤真幸先生、片山杜秀先生の四人をパネラーに、上杉清文先生（当学林教学委員）が書評パネラーとして加わり、司会を大谷栄一先生（仏教大学）が担当。リラククスした雰囲気の中で熱心な発表と討議が三時間にわたり展開された。シンポジウムは、最初に司会の大谷先生が、法華コメンズの連続講座開設の意図から春秋社の発刊に至るまでの経緯、そして新刊本『これからの天皇制』の内容を、短時間での確に解説することからスタートした。

この事前説明によって受講者は、それぞれ独自な六名の講演の概念が分かると共に、主催者の意図が一般的に天皇制を論ずるだけではなく、「日蓮仏教の再歴史化」というこだわりの課題にあったということも理解してもらえたと思う。その後には四人のパネラーによって、「改元後のコロナ禍における天皇制」を踏まえて、各十五分間の発表が行われた。

菅孝行先生は「コロナ禍と天皇幻想―出てこない天皇・出さない政府」という題で、コロナ禍での徳仁天皇の沈黙を政府の抑制によるものと見ながら、平成時代の明仁天皇の発言が政府批判と捉えられて期待されたのは幻想だとして、今後は天皇に依存しない「人々（主権者）の集合」を作ることから始めるしかない」と論じた。

島菌進先生は「国家神道と神聖天皇崇敬」という題で、天皇制とは神聖天皇崇敬であり、日本社会は「空虚な中心」と「空気」で支配される社会であるとして、「国家神道」も「神聖天皇崇敬」もなくなったようではない、問題は東アジアに共通する「権威主義の

構造」をどのように捉えていくかではないかと語った。大澤真幸先生は、コロナ禍の中で「おことば」がなかったことは「天皇が必要ない」ことを示したが、逆説的に日本人は不必要な天皇を棄てられず、必要としているとした。天皇は「空気の空気」として人々の合意・民主主義の前提を作っているが、しかし今後予想される日本の多様化・多人種社会にはそぐわないため、これからの天皇制は、日本国民が政治的主体となるためにも、「天皇を選挙で選ぶ」制度が良い、と提案された。

片山杜秀先生は「これからの天皇制を占う―秋篠宮家を手掛かりに」と題して、秋篠宮文仁が「大嘗祭は宗教色が強い」と題して、その費用は天皇家の私費から出すべき」と政教分離の原則にふれ、長女・真子の結婚について「憲法に結婚は両性の合意のみにもとづいて」とあり、親としてそれを尊重すべき」と個人の権利にふれたことに着目。昭和・平成が「戦争への反省・義務擁護」ならば、令和は「自由に生きる・権利擁護」になるとした。しかし、その「普通さ」が国民に支持されないとすれば「皇室は宙に浮き虚しくなっていく」と予想を述べた。

書評パネラーの上杉先生は、講演内容と今回の発表をふまえながら広く論点を抽出して語り、それぞれ四人のパネラーに質問を出された。司会の大谷先生はその質問内容を①皇室とバチカン（カトリック）の関係、②神聖天皇における霊性の問題、③共和制と君主制の問題（政体について）の三点にまとめて先生方の見解を促して、パネラー間の討論に入った。その後は、受講者からのチャットでの質問を採り上げながら、コロナ禍後のこれからの天皇制をも論じた意義ある充実したシンポジウムを終了することができた。

成功裡に終わることができたのは、ひとえに御協力頂いた諸先生方、受講の皆さま、関連スタッフの尽力のお陰であり、あらためて感謝申し上げます。

『法華経』『法華文句』講義

後期一〇月からの菅野先生の『法華経』『法華文句』講義は、一二月まで対面講義+オンライン実況配信で開催されました。久々の対面講義でしたが、やはり動画配信の講義とは違ってライブ感があつて、先生の話にも熱が入り、対面での充実感を味わえました。しかし、本年一月七日の再度の緊急事態宣言を受けて、一月二五日(月)講義では対面講義は止めて、オンライン実況配信のみで開催いたします。

一二月の講義では、序品中で仏が現じた光明神通の相の因縁を弥勒が文殊に尋ねた、発問序の偈文までを終えています。一月の講義(第三二回)は『法華文句(II)』の三二〇頁の四行目の「是時文殊師利語弥勒」から始まります。資料の「妙法蓮華経並開結(序品・方便品)」(PDFファイル)では、九〇頁の二行目からとなります(『文句』は「是時」だが、全集本は「爾時」)。

宣言が延長されれば、二月もオンラインを続けざるを得ませんが、どちらにせよ受講にあたっては予習・復習が効果的です。ブログの講座報告に、毎回の講義の進行報告が載っていますので、どこまで講義したかが分かります。ぜひご参照ください。(担当スタッフ)



菅野 博史 先生

【法華コモンズ仏教学林 令和3年度 前期講座の一覧】

会場：新宿常円寺「祖師堂地階ホール」新宿区西新宿7-12-5 寺務所 ☎03(3371)1797

受講料：下記の各講座欄をご覧ください。また当日1回のみ受講料は3,000円になります。

※対面講義が不可の場合は、オンライン講義や動画配信などにて代替して開催いたします

「仏教哲学再考——『八宗綱要』を手掛かりに」

講師 末木文美士 先生

※原則 第1土曜日 午後4時30分～6時30分

受講料：10,000円(4回)

第5回：5月8日 / 第6回：6月5日 / 第7回：7月3日 / 第8回：9月11日

歴史から考える日本仏教⑦

講師 菊地 大樹 先生

「日蓮をはぐくんだ房総地域の歴史と宗教を考える」

※原則 第3火曜日(7月は第1火曜日) 午後6時30分～8時30分

受講料：12,000円(6回)

第1講：4月20日 房総地域の古代史 / 第2講：5月18日 鎌倉幕府の成立と房総地域

第3講：6月15日 日蓮の活動と房総地域 / 第4講：7月20日 室町戦国時代の房総地域

第5講：8月17日 房総地域の宗教文化 / 第6講：9月21日 地域史から考える日本宗教史

「日蓮霊跡の再認識と顕彰の歴史」

講師 寺尾 英智 先生

※原則 第4火曜日 午後6時30分～8時30分

受講料：8,000円(3回)

第1講：4月27日 / 第2講：5月25日 / 第3講：6月22日

「『法華経』『法華文句』講義」

講師 菅野 博史 先生

※原則 第4月曜日 午後6時30分～8時30分

受講料：12,000円(6回)

第1回：4月26日

第2回：5月31日

第3回：6月28日

第4回：7月26日

第5回：8月30日

第6回：9月27日

《受講申込み》メール⇒ hokkecommons@gmail.com / ブログ⇒ <https://hokke-commons.jp>

賛助会員一覽(敬称略)

個人会員 ※1口 一万円

6口	小松 正学	2口	西山 英仁
6口	松原 勝英	2口	鈴木 正厳
6口	中野 顕昭	2口	菅野 博史
3口	持田 貫信	1口	長谷川正浩
3口	竹内 敬雅	1口	菊地 大樹
3口	村上 東俊	1口	濫澤 光紀
		1口	匿名 希望

法人会員 ※1口 五万円

2口	東洋哲学研究所	2口	大久寺
2口	持法寺	1口	摩耶寺
2口	本國寺	1口	天龍寺
2口	善龍寺		(以上)

年間賛助会員加入のお願い

法華コモンズ仏教学林では、本学林の趣旨に賛同して運営の維持に協力して頂ける「年間会員」を新学期時に募集しています。下記の要領にて、受付けておりますのでぜひご協力のほどお願いいたします。

【年間賛助会員 加入申込み】

- 個人会員 一年間1口(1万円)
- 法人・団体会員 一年間1口(5万円)

《お申込み年度の特典》として

- 1、個人会員で6口以上の方には、会員のみ使える年間フリーパス受講証を差し上げます
- 2、法人・団体会員では2口で、誰でも使える年間フリーパス受講証を差し上げます

※「年間フリーパス受講証」は、開設の全ての講座を一年間にわたりの受講することができます。

●お申込み頂ける方は、右の内容を書いて、表紙タイトルまたは頁下にあるメールアドレス、フックス、ブログからお申し込み下さい。

- ★ 個人か法人か、また何口かを明記する。
- ★ 名前、年齢、住所、電話、フックスまたはメールアドレスを明記する。

●直接にご加入・ご支援を頂ける方は、郵便振込用紙にて通信欄に口数をご明記の上、同封の振込用紙か、左記の口座にてお振込み下さい。

【口座名】 法華コモンズ仏教学林
【口座番号】 001500776334712

「講座映像版」販売のお知らせ

菊地大樹先生の「歴史から考える日本仏教」講座シリーズですが、新たに②④が頒布されました。

○ 菊地大樹先生 「吾妻鏡」と鎌倉仏教」

○ 池上要靖先生 「初期仏教研究」

○ 菊地大樹先生 「歴史から考える日本仏教①」

「歴史から② 《顕密問題》を考える」

「歴史から③ 日本宗教史の名著を読む」

「歴史から④ 鎌倉仏教史の名著を読む」

◎ダウンロード版：価格12,000円(消費税込)

全6回講義の動画ファイルとレジュメPDF

◎DVD版：価格12,500円(消費税・送料込)

全6回講義のDVD6枚組とレジュメ印刷物

この詳細につきましては、法華コモンズのブログ (<https://hokke-commons.jp>) をご参照ください。

法華コモンズ通信 第6号

○発行日 2021(令和3)年2月1日

○編集発行 法華コモンズ仏教学林

○発行所 法華コモンズ仏教学林 事務局

一九二〇〇五一 東京都八王子市元本郷町二一九

【FAX】042(627)7227